

ところが、梅がほころびはじめたこの春のことである。

私はある敬老会に招かれて松山収容所の話をしたところ、会が終わったあとで井出さんという九十歳の方から呼び止められた。井出さんは畳の上に風呂敷を広げ、一冊の本を取り出した。相当な年代ものらしく、全体に茶色っぽく変色している。井出さんはその本をずっと私のほうへ押しだした。

「こんな本があるのを知っとるかの」

「さあ、何でしょう」

私は本を手にし、表紙をめくってあつと声をあげた。

見開きの最初に、『松山俘虜収容所編、松山収容露国俘虜』と書名が墨書されていた。書名の横にはマル秘印が押されている。

私は翁と本を交互に見比べ、しばし言葉を失った。というのもこの本はまさに幻の書物であった。松山収容所が明治三十九年二月五日に刊行し関係者に配布したが、即日すべて回収されたいわくつきのものだったのである。

翌日の海南新報には、「この書物の記述にロシアへの偏見や誤解があり、講和条約への気遣いのため即日全面的に回収され焼却処分された」

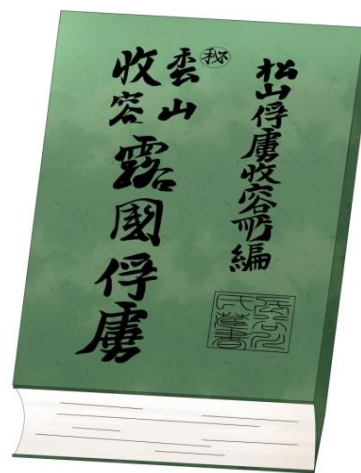
という刊行の顛末を報じた記事があり、私はてっきりこの書物はどこにも存在しないと思い込んでいたのである。警察官をしていた父上が松山収容所周辺の警備を担当していた関係で手に入り、返却せずそのままずっと隠し持っていたのだと翁は説明した。

さっそくお借りし、無駄とは思いつつ私はソローキンの文字を探して読み始めた。

『露国俘虜』は松山収容所が俘虜生活で観察したことがらを「日常生活ノ上、日常生活ノ下、旅順ノ俘虜、民家居住者ノ景況、病室、地方ニ及ボシタル影響、平和克服後ノ露国軍人」の七編六十六章にわたって詳述し編纂したもので、高野殉庵が重々しい内容の「叙」を誌している。

「病室」「旅順ノ俘虜」と任意に読みすすめた私の目は、「俘虜ノ犯罪」の箇所ですぐ釘づけになった。「逃亡者ミルスキー中尉ノ陳述書」の章の中に、思いがけずソローキンの名前を見つけ出したのであった。「陳述書」は高野殉庵に提出したもので、ミルスキーはこの中で逃亡の理由をおよそ次のように述べていた。

「捕虜の身に甘んじて逃亡せずにいることは、日本政府に収容所の警備を手軽



挿絵 (K. Ohnishi)

にさせ、それだけ前線に兵力を注ぐことができ、日本政府の益するところが大きくなる。また、逃亡しないと日本政府に誓うことは、すでにロシア皇帝に忠誠を誓った自分にはとうてい許されないことである。したがって、誠実自他を

^{あざむ}欺かないことを誇りとする世襲貴族の自分は、逃亡することによって、ニコライ二世陛下への宣誓を厳格に守ろうとするものである」

ミルスキーは捕虜になった当初から自分のこうした考えを広言していたので、収容所側は十分警戒していた。また、捕虜仲間にはかれの騎士道に賛同する者も少なくなかった。『露国俘虜』ではこのあたりのことを次のように記述し、この箇所にも一度だけソローキンの名前が登場する。

「収容所ニオイテハ、ミルスキー中尉ノ動静ニ重大ナ関心ヲ払ッテイタガ、アレクセイエフ・ユーゲビッチ・ソローキン少尉ヲ初メ、五名ノ下士卒ガミルスキー中尉ノ逃亡ニ加担シタ」

ミルスキーが逃亡したのは、明治三十七年七月十九日の夜の十一時であった。逃亡に加担した下士卒五名も収容所として使われていた祥宗寺から同時に脱走した。

『露国俘虜』の記録によれば、かれらはいずれも頭髪を短く刈り、^{ひとえ}単衣の和服に下駄履きで日本人を真似ていた。逃亡者たちはいったん南の方角へ星を頼りに歩いて、山奥の闇の中に姿を隠し翌朝、今度は進路を西北へとると海をめざして山道を歩いた。かれらは捕虜として上陸した三津浜から二里ほど西にある吉田浜の漁港で船を借り、神戸に行こうとしたのであった。

逃亡して三日後の昼、吉田浜をとぼとぼ歩く見かけない男たち五人の様子を怪しんだ地元の漁師が、不審者たちを警察に通報した。三人の警官がかけつけてみると、五人は船底を上にして浜辺に引き上げられた釣舟の下にもぐりこみ身を潜めていた。舟のまわりは漁師たちが取り囲んでいる。警官を見て逃げられないと悟ったのか、四人はおとなしく捕縛された。が、この時ミルスキーだけは制止をふりきり砂浜をかけた。それで、いちばん歳の若い警官がかれを追いかけ、砂地に組み伏せたのである。この警官は井出兵八といい、この時の勇気ある働きが認められ講話条約後、二階級特進したと記されている。



おやっ、と私は思った。

井出兵八という警官は、井出老人の父上ではないだろうか。自分の手柄話が

記録されていることに感激した兵八が、『露国俘虜』を隠し持ったと推察できる。そうだとすれば、井出さんは父上から、この部分の記述の不自然さについて、きっと何か聞いているにちがいないと私は確信した。

私は執筆者の意図を探って、何度もこの記述を読み返した。

逃亡将兵は最初六名だった。そして、三日後に捕縛されたのは五名である。その五名はミルスキー中尉と下士卒四名のようである。いや、それとも捕縛された下士卒は三名で、将校はミルスキーとソローキンの二名で合計五名と読めないこともない。前者の推定の方が正しい気がするが、どちらにしろ一名が行方不明になった。そして、なぜかこの重大な事実を『露国俘虜』は暗に^{ほの}仄めかしている。

井出さんにお会いして話を伺うと、兵八警官は確かに父上だった。晩年、兵八警官はこの部分の記述にこだわっていた。

というのも、ミルスキーらを収容所へ連行する途上、兵八警官はミルスキーから次のようなことを頼まれた。

「逃亡シタ最初ノ夜、ソローキントイウ名ノ将校ダケガ、日本軍ヲ攪乱スルタメ、山中デワレワレカラ離レ、別ノ方角ヘ逃ゲタノダガ、カレヲ捕縛スル際モ、ドウカ騎士道精神デ願イタイ」というのだ。それで、兵八警官はソローキンのことを収容所へ連絡したが、収容所は逃亡将兵は五名だけであるとし、ミルスキーから聞いたことは一切口外してはならぬ、と達しがあった。さらに数日後、講話成立の時は二階級の特進を約すると望外の話が警察本部からあったのである。

いったい、これらの事実は何を物語っているのだろうか。

松山収容所はこの逃亡事件に関与した可能性がある。だが兵八警官は口止めし、なぜ『露国俘虜』にはソローキンの名を書き残したのだろうか。わからないことばかりである。

ところでこの謎を探るため、日露戦争の一端について述べたい。というのも日露戦争は軍事力による戦いだけでなく、国際的な謀報破壊工作戦という側面をもっていたからである。

日露の緊張が高まるにつれ、謀略工作はますます盛んになり、日露開戦の年に



挿絵 (S. Ikemoto)

は二月から四月にかけて、旅順だけでも三十余名の日本人が間諜^{かんちょう}の容疑で逮捕されている。かれらは「日探」と呼ばれ、ロシアに大きな脅威を与えた。

そして日露の開戦はロシア全土に大量の失業者を生じ、反政府運動を勢いづかせ革命機運が盛り上がった。

願ってもない好機であった。

明治政府はロシア国内の不穏な空気をあおり、戦争の相手の心臓部に一撃を加えようと試みるのである。

ちょうどこのころ、旅順港口の閉塞作戦は思うような成果があがらず、東郷の連合艦隊は旅順港沖に釘づけにされたままであった。そして難攻不落の旅順要塞を攻め落とすめどがたたないままいたずらに時が流れ、バルチック艦隊の極東派遣が現実のものとなる日が刻々と近づいていた。